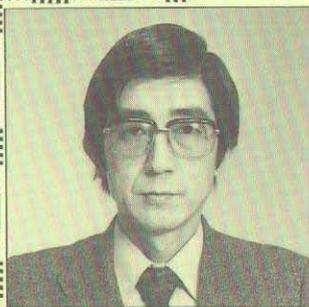


## 学会の国際化について

調査理事 大附 辰夫



最近、国際化という言葉を目にする機会が多くなりました。当学会においても、英文論文誌の強化、国際交流基金の設立、国際会議開催手続きの簡素化、など国際化を目指した企画が具体化されつつあります。しかし、“国際化とは何か？”と聞かれると、意外と答に窮するものです。同様に、“国際会議”とそうでないものを厳密に区別することは難しいと思います。要するに、国際化とは、“活動あるいはそれに参加する人々を現状よりも更に外国（人）に開かれたものにする”ことであり、その実態は時代と共に変化するもののように思われます。

国際化という言葉が最近特に強調されるようになった理由は、近年の急激な情勢の変化に対応するために、より具体的かつ抜本的な国際化のための施策が求められているからだと思います。日本人が国際会議で発表することが画期的であった数十年前に比べると、いくつかの根本的な情勢の変化があるようです。第1に、当学会が主体的に関与した国際会議が初めて開かれたころを基準と考えれば、日常茶飯事として国際会議が日本で開かれている現在は格段の国際化が達成されていることとなります。一方、これらの国際会議を国内の会議と同等のレベルで処理できるように手続きを簡素化すべきであるという別の意味の国際化が必要になってきました。第2に、欧米指向から東南アジア指向へと国際化の焦点が移り始めたということが挙げられます。欧米の学術的レベルに達することが目標であったころと比べれば、今や、欧米の研究者と情報交換するだけでなく、発展途上国の学術活動の発展に協力することも我々の使命であると考えられます。第3の視点は、会員数や刊行物の発行部数に反映される学会の成長のための施策が、国内だけを対象とすることに限界が見えてきたということです。IEEEにおいても、従来米国内の活動で満足していたのに、今や国際化という大方針を掲げて、米国外、特に環太平洋諸国を対象とした会員増とサービスの向上に努めています。これも同じ意識に基づいていると思われます。

以上、当学会が直面している国際化のための課題に触れましたが、我々の目標は、国際会議あるいは外国人の会員というものを特に意識することがないような環境を作ることだと思います。最近はその方向に動きつつありますが、現状では、未だ国内と国外との区別を全く必要としない段階には至っておりません。今後、欧米だけでなく発展途上国を含めた外国の文化・習慣、外国人の行動・思考様式をより深く理解し、これらを包含した体制を確立することを目指したいと思います。